



眼を養い 手を練れ 2

集まってもう

居住空間デザイン講師室編著

第一章 集まって住む「かたち」.....9

並ぶ.....12

囲む.....14

密集する.....22

分散する.....26

独立する.....28

つながる.....30

断面的に組み合う.....32

立体的に組み合う.....36

●column

シーランチ.....16

客家住宅.....20

第二章 集まって住む「関係」.....41

領域をダイアグラムで考える.....44

人間モデルで考える.....46

フリースペース.....50

公私の間の中間領域.....52

アクセス空間のしかけ.....54

自然との間の中間領域.....60

「離す」こと.....62

●column

表出.....56

人が集まる場.....58

個が集まる光.....64

個を分ける光.....66

下町・長屋の生活.....68

第三章 集まって住む「しくみ」.....73

単身居住.....76

シェア居住.....84

参加.....92

サステイナビリテイ.....96

パブリックハウジング.....100

●column

「個人用居住単位」という課題.....78

コハウジング.....88

第四章 集まって住む「場所」.....105

外部の敵.....108

血縁.....110

地形・自然・風土.....112

都市・街・道.....116

農のしくみ.....118

自然のしくみ.....120

百年の計画.....122

緑地とコモン.....124

ランドスケープ.....126

●column

マー・ヴィスタ・ハウジング.....130

五つのハードと一つのソフト.....132

事例参考データ.....136

参考文献.....140

あとがき.....144

略歴.....146

私たちのほとんどは、都市や街や住宅地や集落に住んでいる。

自分の住居の隣には他人の住居があり、一人きりになれる部屋や、特定のグループ（家族や同じ建物に住む人びとなど）で共に使い交流できる廊下や部屋や庭があり、外に出ると路地や公園や図書館や駅などの誰もが利用できる場所がある。つまり、自分だけが使う（専用の）場所、何人かで使っている（共用の）場所、皆が使っている（公共の）場所があつて、時と場合に応じてそれらを利用している。

生活のエリアでは、そのような専用と共用と公共の空間が入り交じって混然一体となっている。そのような関係だけを見れば、住宅地でも、マンションでも、世界中の都市や集落でも、密度やかたちやしくみの細かな違いはあつても共通点は多い。

そのように「集まって住む」という視点から見たならば、世界中の都市や集落は、一つの集合住宅と考えることだつてできる。たとえばイタリアやフランスの都市や京都の町家やイスラムの街区などでは、建物を建てる面積が限られているため人口密度も高い。それらを見たなら、街区が一体となつて関係し合っているのが分かり、その路地や中庭はよくあるマンションの廊下や庭と同じように狭い。しかしその中には、周りの人との関係をよく保つことができ、さまざまなことをするのに便利で、豊かで魅力的な生活環境をつくり上げるための工夫がたくさんある。そこには、私たちがこれから住宅や集合住宅などを考えていくうえでヒントが溢れているということでもある。

そこでこの本では、そのような示唆に富んだ事例を四つの切り口で紹介している。

第一章では、集まって住む「かたち」を集合住宅を中心に見てゆく。集まり方にもさまざまな種類と特徴があることが分かると思う。

第二章では、集まって住む「関係」をコミュニティとプライベートの視点でより詳細に読み解いていく。その関係が住環境を左右するポイントなのが見えると思う。

第三章では、集まって住む「しくみ」に注目して考察している。人の関係にまで踏み込むと新た

な可能性が広がってゆくはずだ。

第四章では、より広く郊外や集落といった集まって住む「場所」を考えている。住宅地でもまだまだ考えることがあるのが分かるだろう。

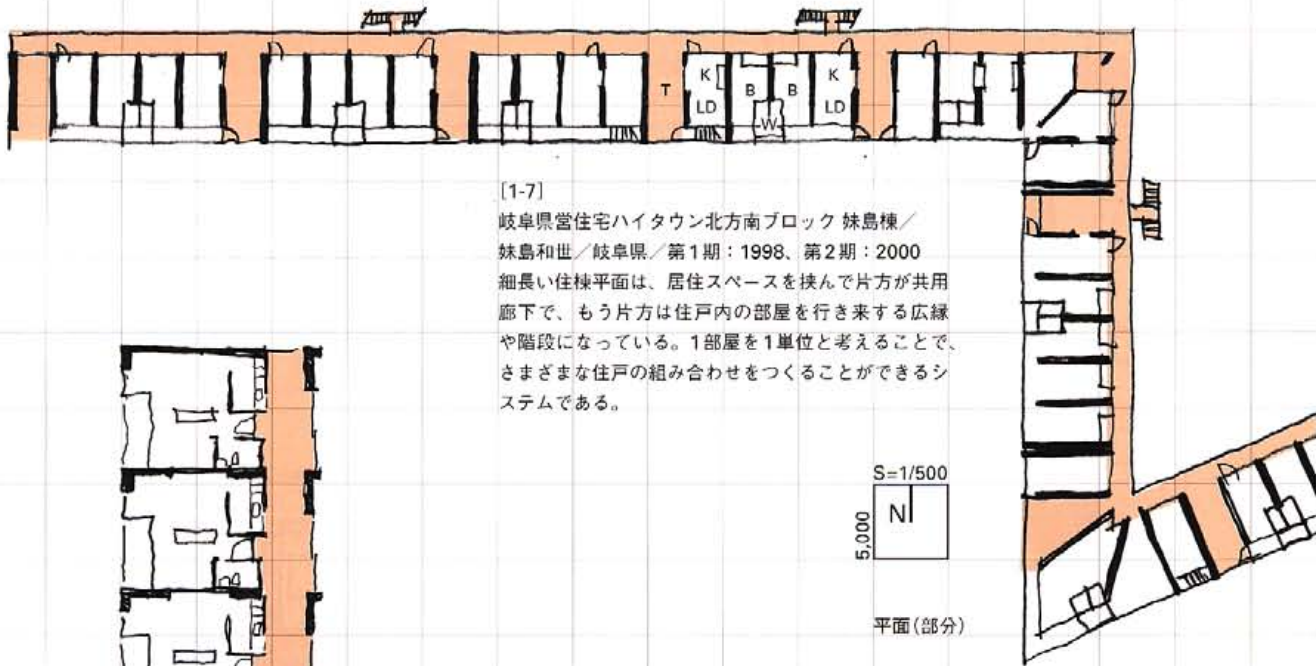
全体として体系を編むというより、さまざまな事例を並べて見ることでその面白さと新たな可能性を浮かび上がらせることができなかつたと思つている。新旧の世界中の事例を並べてみると同じようにでいて、集まり方にもいろいろな方法がある。配置の仕方から細かなしつらえや住人の関係まで、さまざまなスケールやレベルで、共通しているところ、異なるところが改めて見えてくるだろう。

そのために基本的に、図面の北を上とし、配置を表す図は二〇〇分の一（二cmが一〇m）、住戸の構成や関係を表す図は五〇〇分の一（二cmが五m）、住戸の内容を表す図は二〇〇分の一（二cmが二m）の縮尺にできるだけそろえて、一〇mmマスのグリッドの上に配置した。本書を開けば、スケッチブックに描かれた図面を見ているように感じられるだろう。

また、ここで取り上げているのは、事例のある一面である。巻末には事例参考データと参照文献をリストアップしているので、興味をもつた事例はぜひそれらでより詳細に調べてほしい。

最後に、この本は『眼を養い手を練れ宮脇檀住宅設計塾』（宮脇塾講師室編著、彰国社）の集合住宅編として考えたものである。前著の宮脇塾講師室とは、建築家・宮脇檀まゆみ氏が始めた日本大学生産工学部建築工学科「居住空間デザインコース」の講師陣のことであり、この『眼を養い手を練れ2 集まって住もう』は、前著の後で講師に加わった新メンバー五人が中心となつてまとめたものである。

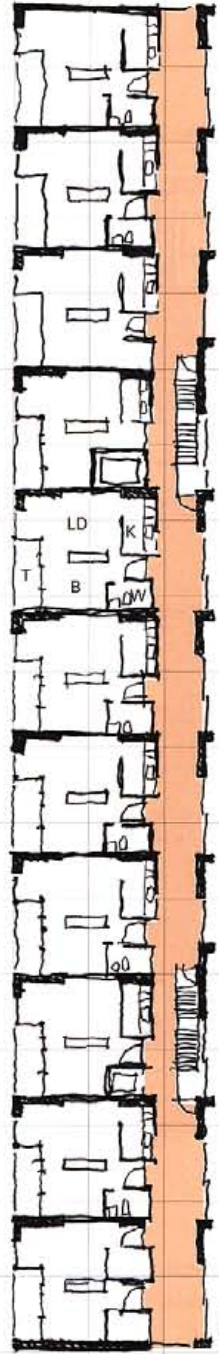
当初、学生向けの集合住宅設計入門のつもりでつくり始めたのだが、各自考えて話し合つていく中で、これからの集合住宅を考えるには、より広く「集まって住むとはどういうことか」から考えなければならぬことに改めて気づいた。それは、居住環境や都市を考えることともつながつてくるのである。



[1-7]
 岐阜県営住宅ハイタウン北方南ブロック 妹島棟 /
 妹島和世 / 岐阜県 / 第1期：1998、第2期：2000
 細長い住棟平面は、居住スペースを挟んで片方が共用廊下で、もう片方は住戸内の部屋を行き来する広縁や階段になっている。1部屋を1単位と考えることで、さまざまな住戸の組み合わせをつくり出すことができるシステムである。

S=1/500
 5,000
 N

平面(部分)



[1-8]
 マサシの老人ホーム / ビーター・ズントー /
 スイス、クール / 1993
 南北軸に沿って建ち、廊下を東に広く取り、幅に変化をつけているので、あちこちに明るい溜まれる場所ができています。廊下に面して各戸のキッチンが設けてあり、大きな窓もある。ここでは食堂やリビングでなく、キッチンが廊下を行き交う人との交流の場となっている。

B: 寝室
 L: リビング
 D: ダイニング
 K: キッチン
 W: 浴室・トイレ
 T: テラス

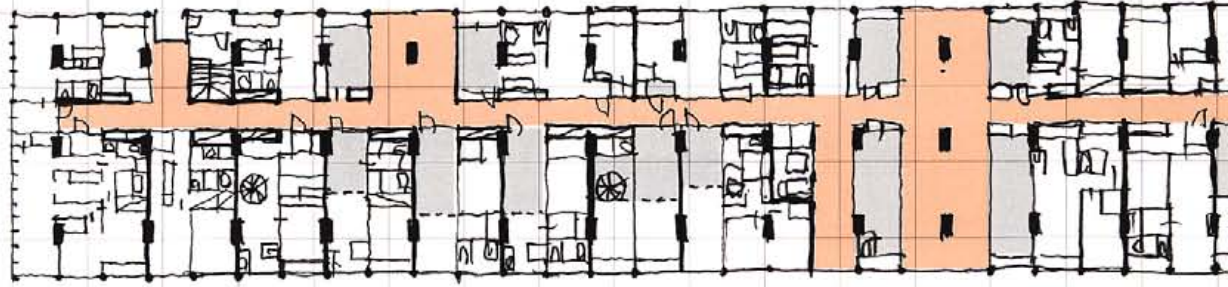
S=1/500
 5,000
 N

平面

は、経済性を求め、施工上も効率をよくするために同じ住戸が何の変化もなく並び、その共用廊下も狭くて北側の寒々とした場所になりがちだ。また、外観もテラスや廊下が並び単調なものになることが多く、住棟のボリュームも大きくなるため、周囲の環境とは異質なものになっていることが多い。かつて宮脇信は、「廊下を単に廊下と考えるか、一種の道として、人びとの触れ合う場所として考えるか。その違いだけで、暗い灰色の廊下を明るいコミュニティの場にすることはできる」といった。

ある調査で、玄関は、戸建て住宅においては「表」の意識が強いが、マンションでは「裏」の意識が強いそう。そこに住人の顔としての表の意識が生まれなければ、共用スペースに活気は生まれず、明るく楽しい場所にはならないだろう。

平面(部分)



[1-5]
 東雲キャナルコート CODAN1 街区 /
 山本理顕 / 東京都 / 2003
 集合住宅に仕事場 (SOHO) を混在させることで、各住戸を密室化しないで、社会に開く契機をつくらうとしている。各住戸の共用廊下に面したガラス張りのスペースがあちこちにあるため、廊下から住戸やSOHOの気配が感じられる。

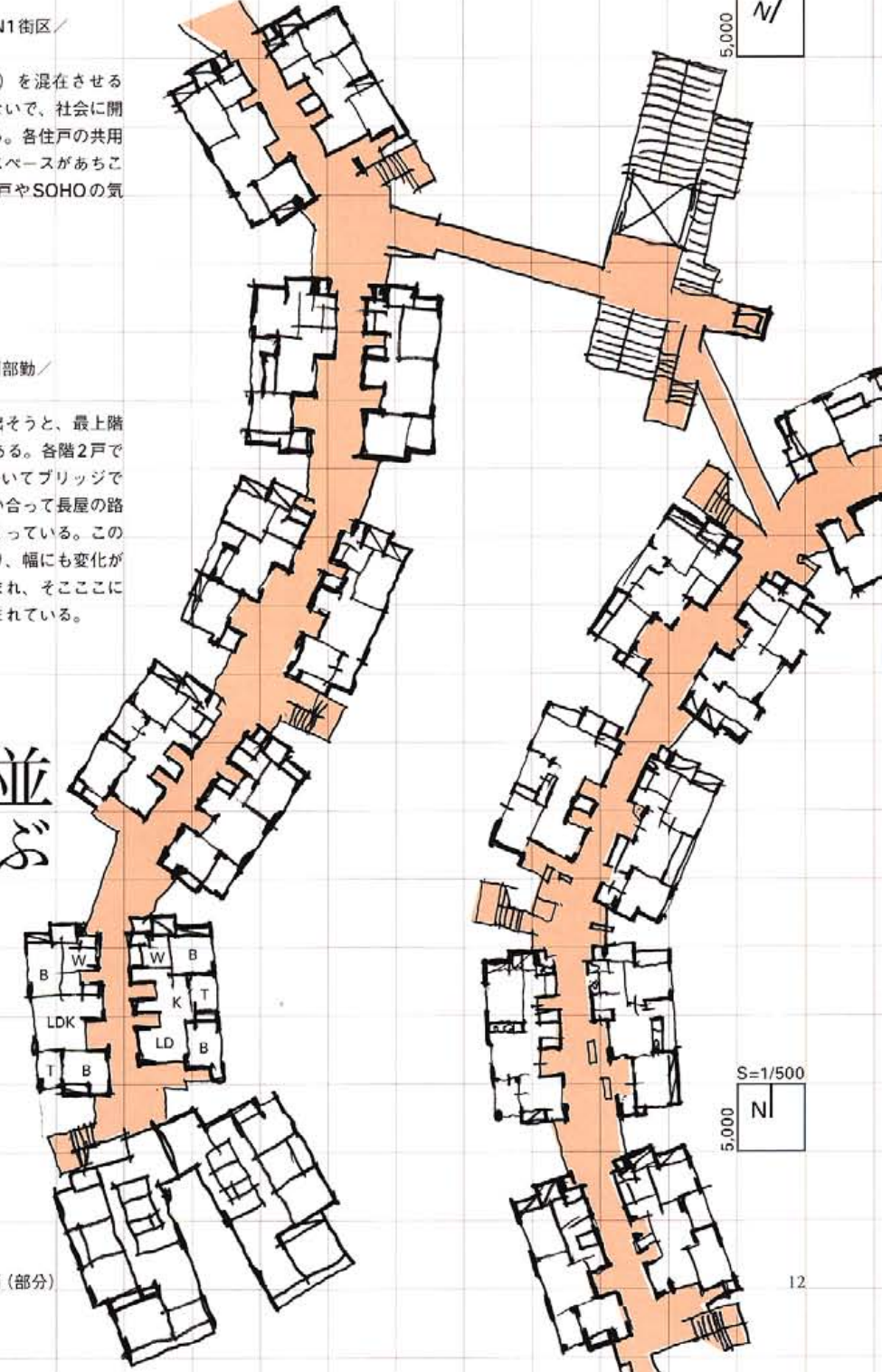
S=1/500
 5,000
 N

[1-6]
 岡山県営中庄団地第2期 / 阿部勤 /
 岡山県 / 1996

低層でなくとも路地を生み出そうと、最上階に「路地」をつくった例である。各階2戸で3階建ての数棟が、3階においてブリッジで結ばれ、高齢者住居が向かい合って長屋の路地のような屋外中廊下をつくらっている。この路地的空間は緩やかに曲がり、幅にも変化があるため、視界に変化が生まれ、そここにたたずんだり休む場所が生まれている。

並ぶ

道に沿って住戸が並び京都やパリのように、廊下に沿って住戸が並びかたは、数少ない階段やエレベーターで多くの住戸に効率よくアクセスできる配置である。しかし多くの場合



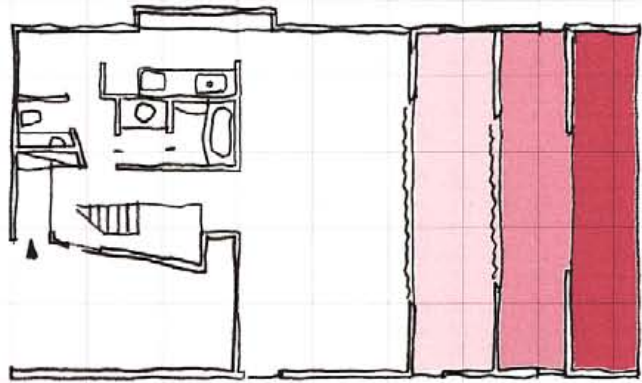
S=1/500
 5,000
 N

3階平面(部分)

12

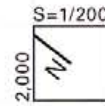
自然との間の 中間領域

一般的な集合住宅の各住戸にはテラスかバルコニーが付いているのが普通である。一階のテラス付き住戸のほかはほとんどが建物の外壁に取ってつけたようにバルコニーが付いている。バルコニーはたいてい避難用スペースとして設けられていて、洗濯物干し場や設備機器置場として使われていることも多い。たぐさんの大切な機能を担っているのどつい忘れがちだが、自然を感じるための装置という、もう一つの大きな役割がある。気候の厳しい環境においては厚い壁によって外界から遮断した気密性の高い住空間が適しているかもしれないが、日本の大部分が属している温暖な環境においては、集合住宅といえども自然との触れ合いは大切である。取ってつけられたバルコニーにするのではなく、さまざまな建築的工夫により屋外と屋内の間に中間領域をつくり出すことで、生活の中の自然とのつながりがより豊かになっていく。

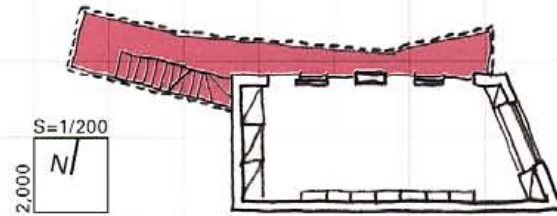


1階平面

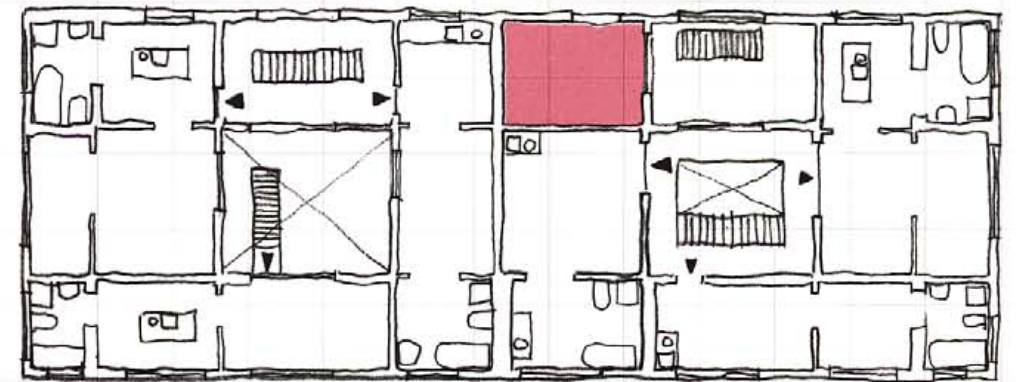
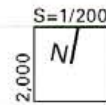
[2-40]
間の門 / 五十嵐淳 / 北海道 / 2008
居住空間の奥から屋外に向かって段階的に空間が設けられている。それぞれの領域に設けられた仕切りの開閉によって、自然とのかかわり合い方を段階的に調整できる空間構成となっている。外と内の二者択一ではなく、いろいろな種類の外や内がうまくつくられている。生活の中での自然とのかかわりの多様性が大きく広がりそうである。



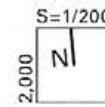
[2-41]
[laatikko] / 木下道郎 / 東京都 / 2009
居住空間の外側に風や光を通す半透過のスクリーンを設けることで外と内の間に中間領域が生まれている。ここでは廊下と階段がその中間領域につくられているので、日常の生活の中に自然に外部空間が入り込んできている。それとともに中の生活がおぼろげに外に伝わっていく。都会の住宅密集地ならではの自然と街との付き合い方である。



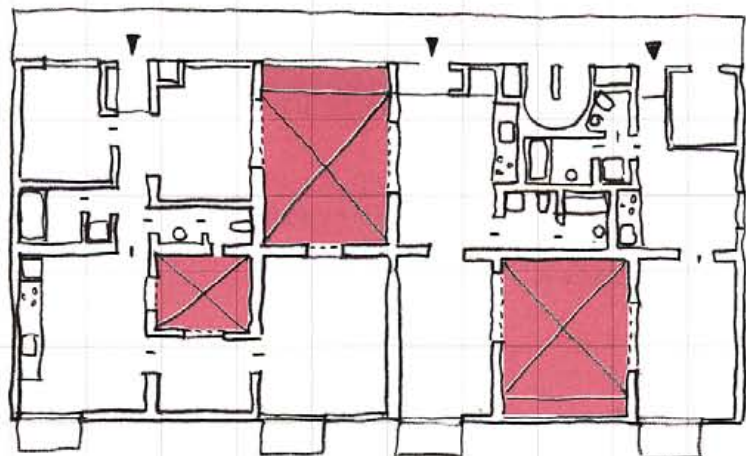
2階平面



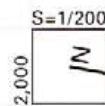
3階平面



[2-38]
船橋アパートメント / 西沢立衛 / 千葉県 / 2004
まずは特異な平面構成に圧倒されてしまうが、自然とのかかわりという視点でよく観察してみると、壁で囲まれたセルのいくつかが屋外であることが分かる。屋外空間をあたかも1つの部屋のように取り込んでしまうことで、自然との不思議なかがわり方が生まれている。



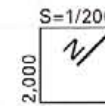
4階平面



[2-42]
調布の集合住宅 A / 西沢大良 / 東京都 / 2003
設計者によって「ライトルーム」と名づけられた、居室に光を取り入れるためだけのヴォイドが建築内部に設けられている。採光、通風、観望など窓のたくさんの機能のうちの1つに限定することによって、新しい感覚の中間領域が生まれている。不思議な空間である。



2階平面

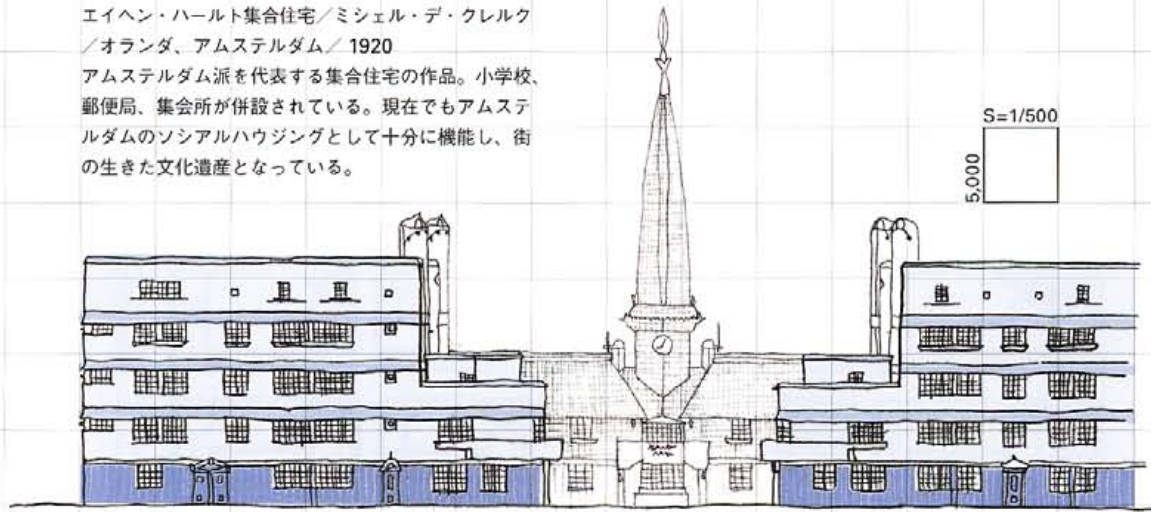


[2-39]
サッポロアパートメント / 納谷学 + 納谷新 / 北海道 / 2008
建物に穴を開けるような形でつくられた不整形な屋外空間に面して、各ユニットが大きな開口をもっている。外に張り出すのではない屋内的なインナーバルコニーは屋内の延長として使うことができる。

[3-51]

エイヘン・ハルト集合住宅 / ミシェル・デ・クレルク
/ オランダ、アムステルダム / 1920

アムステルダム派を代表する集合住宅の作品。小学校、郵便局、集会所が併設されている。現在でもアムステルダムのソーシャルハウジングとして十分に機能し、街の生きた文化遺産となっている。



立面

現代ヨーロッパでは戦後、PCを用いたプレファブによる建設を進めてきたフランスは、建築家によるさまざまなスタイルの集合住宅を供給してきた。フランスではいろいろな建築家の表現対象となった社会住宅だが、結果として、移民などの低所得者向けのコミュニティとして機能しているところが多いようである。

その維持管理に掛かる経費負担を抑えるため、ソーシャルハウジングがいち早く普及したオランダは、アムステルダム東部港湾地区開発計画などでは、新しい魅力的な住空間を分譲することによって、街に活気を与えようとしている。公共の住宅政策も財政負担の多い社会住宅から分譲住宅へと変貌している。パブリックハウジングという概念は過去の夢になろうとしている。

しかし、スペインでは二〇〇四年に社会労働党が成立し、EU統合以来、高騰する住宅価格に対応するために大規模なソーシャルハウジングが多くつくられている。またそれが大きな財政負担となっている。かつて政策の機軸となっていたソーシャルハウジングはどのような道をたどるのだろうか。

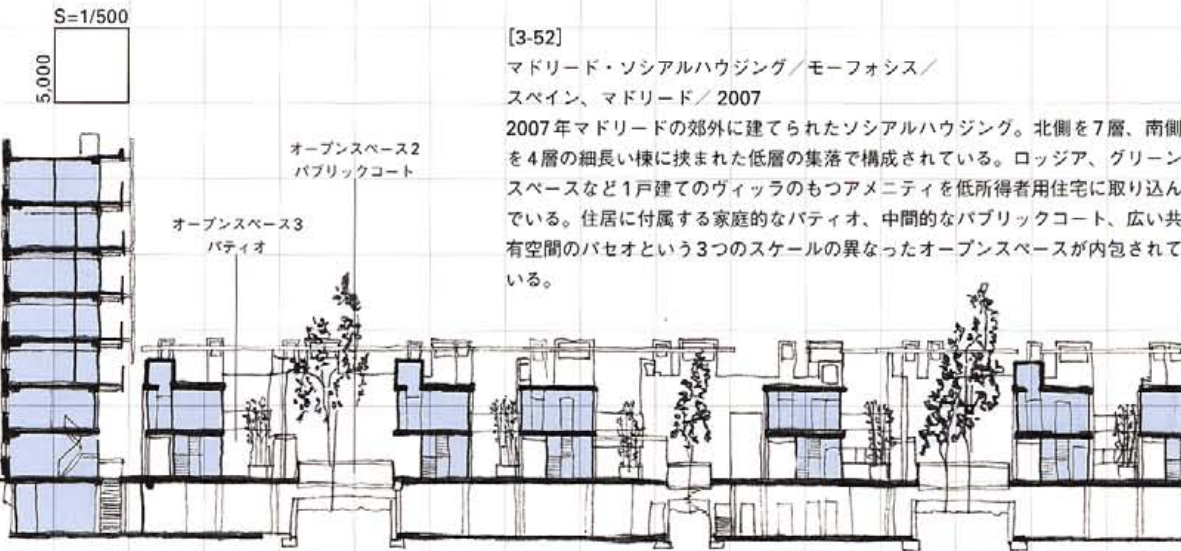
[3-52]

マドリード・ソーシャルハウジング / モーフォシス / スペイン、マドリード / 2007

2007年マドリードの郊外に建てられたソーシャルハウジング。北側を7層、南側を4層の細長い棟に挟まれた低層の集落で構成されている。ロジヤ、グリーンスペースなど1戸建てのヴィッラのもつアメニティを低所得者用住宅に取り込んでいる。住居に付属する家庭的なパティオ、中間的なパブリックコート、広い共有空間のバセオという3つのスケールの異なったオープンスペースが内包されている。

オープンスペース2
パブリックコート

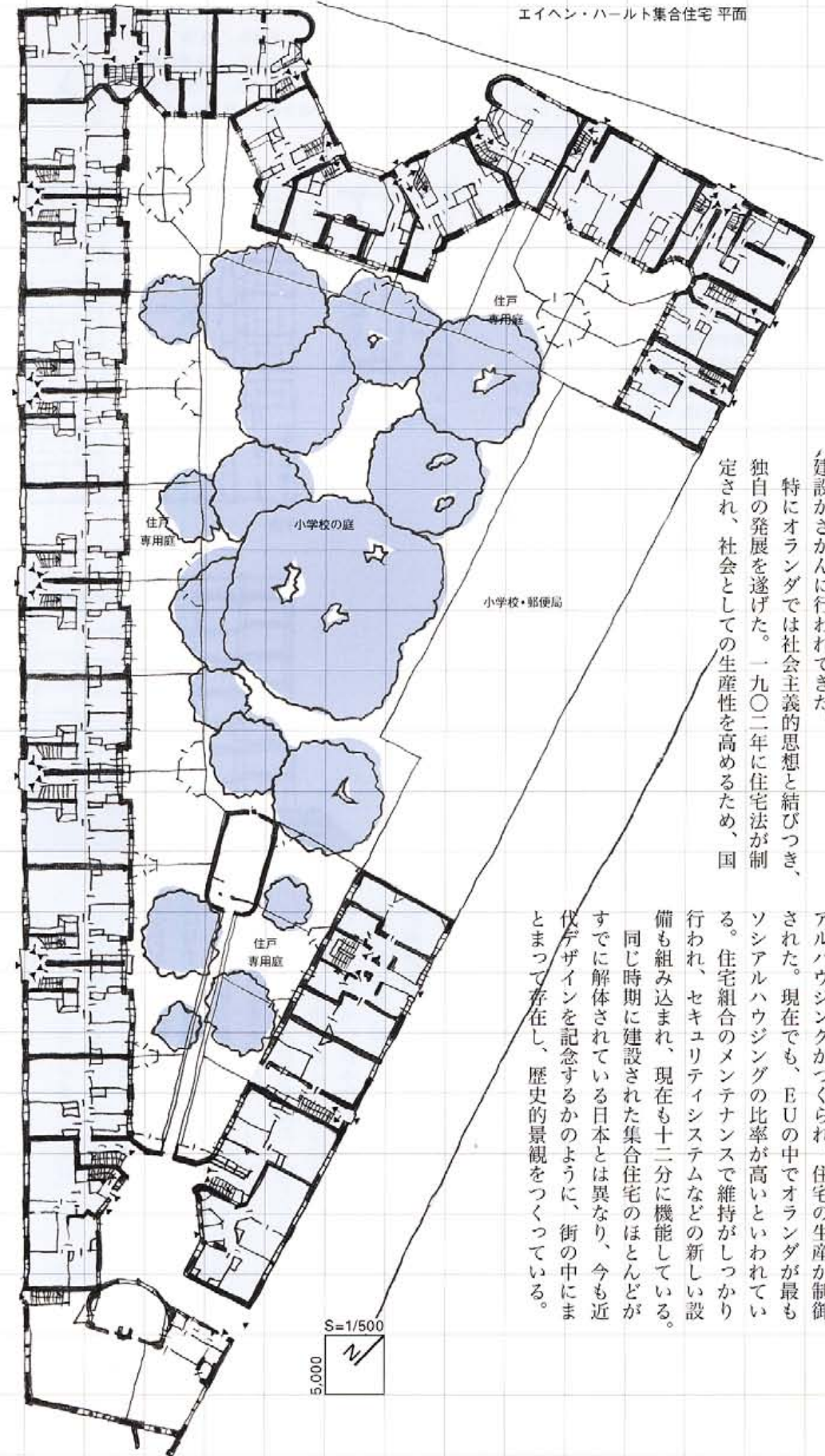
オープンスペース3
パティオ



断面

エイヘン・ハルト集合住宅 平面

パブリック ハウジング



近代ヨーロッパでは

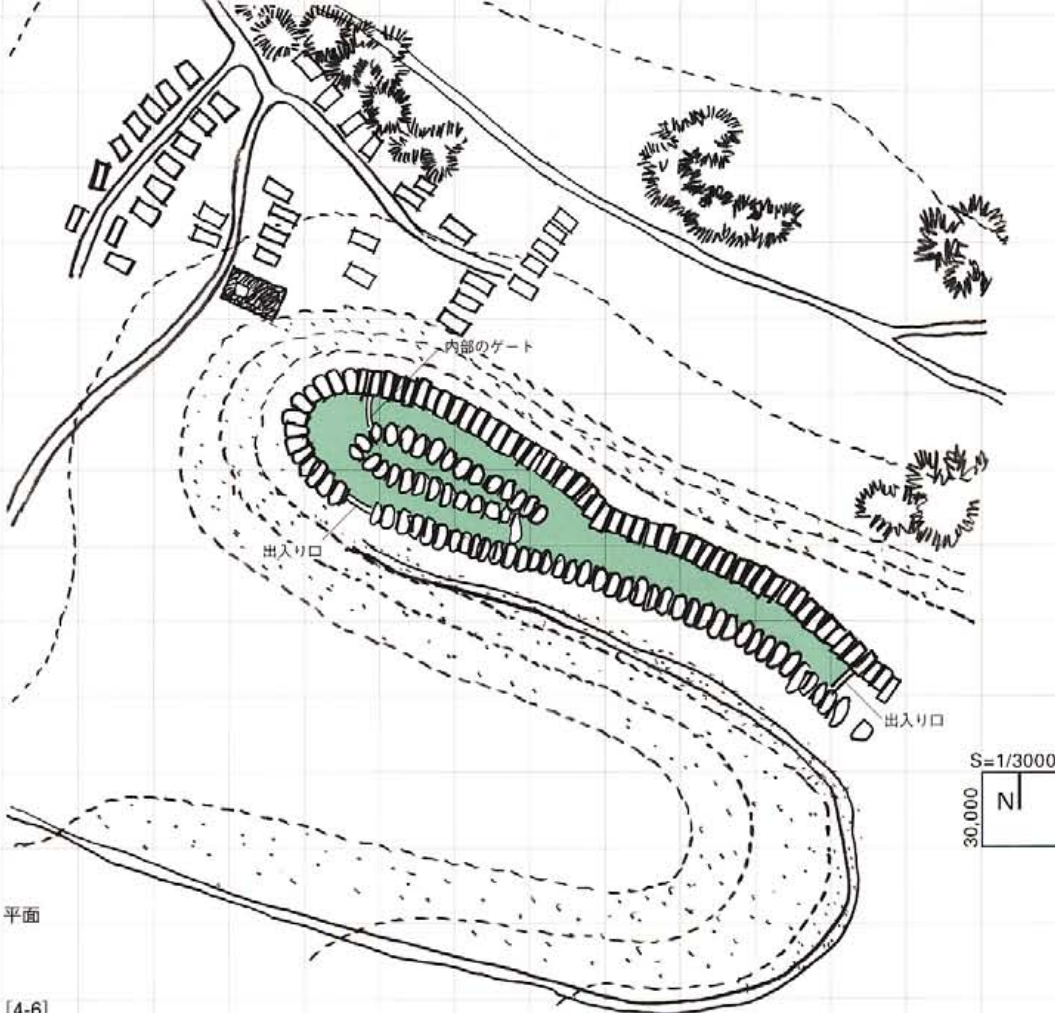
ヨーロッパでは、都市居住の拡大とその質の確保から、社会住宅（ソーシャルハウジング）の建設がさかんに行われてきた。

特にオランダでは社会主義的思想と結びつき、独自の発展を遂げた。一九〇二年に住宅法が制定され、社会としての生産性を高めるため、国

民が低家賃で質のよい住居で暮らすことが目指された。また、国家間の商品価格の競争を優位にするための国家的社会福祉政策として、ソーシャルハウジングがつくられ、住宅の生産が制御された。現在でも、EUの中でオランダが最もソーシャルハウジングの比率が高いといわれている。住宅組合のメンテナンスで維持がしつかり行われ、セキュリティシステムなどの新しい設備も組み込まれ、現在も十二分に機能している。同じ時期に建設された集合住宅のほとんどがすでに解体されている日本とは異なり、今も近代デザインを記念するかのようには、街の中にまとまって存在し、歴史的景観をつくっている。

外部の敵

ここでいう敵は、必ずしも人間を指すものではない。ジャングルのような大自然であったり、砂漠の乾燥した大地であったり、戦わなければならない環境を含む。都市化やグローバル化から距離を取ること外部に對峙しているといえるだろう。もともと集落というのは多かれ少なかれ防衛的形態となっている。それは集落の付まいや集まり方の特徴となり表出する。對峙しているものが何か？ 何を守っているのか？ をそこから読み取ることができる。

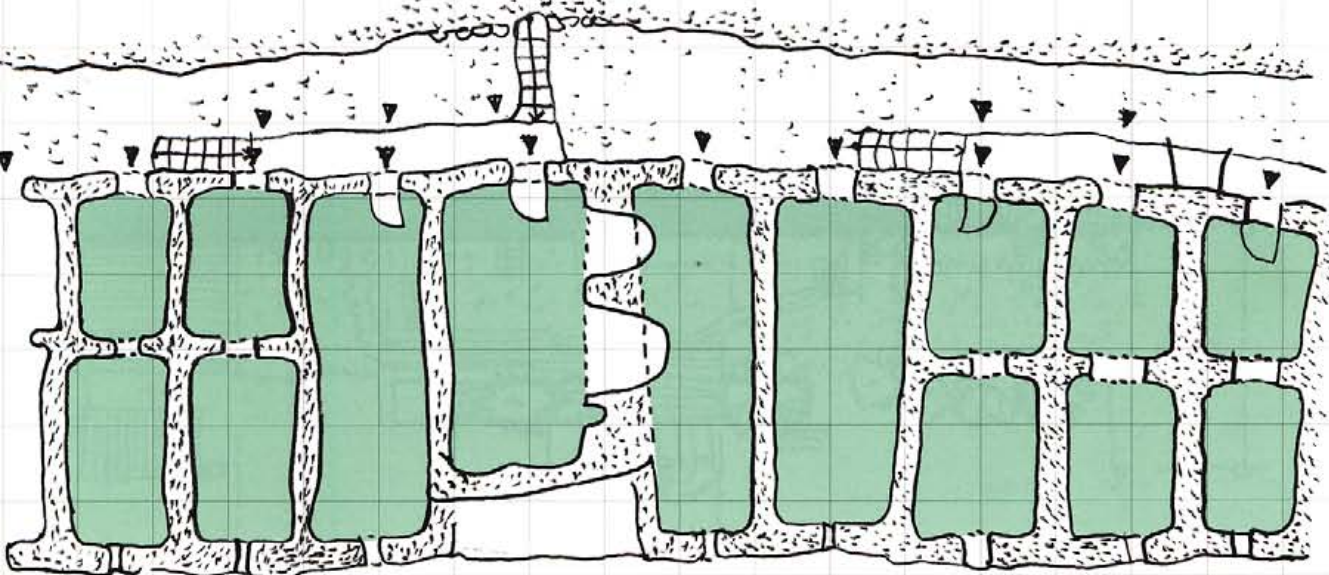


平面

[4-6]

クサル・ウレド・デバブ／北アフリカ

北アフリカのベルベル部族の穀物倉庫（クサル）群であり、基本的にはこの中で生活はしていなかったようだ。しかし、一時的な避難場所として使用され、線状の広場が生活空間となり、平穏な時期にはマーケットや社交の場にもなっていた。クサルには2カ所の出入口のみ、内部もゲートで分割され長老が仕切っていた。

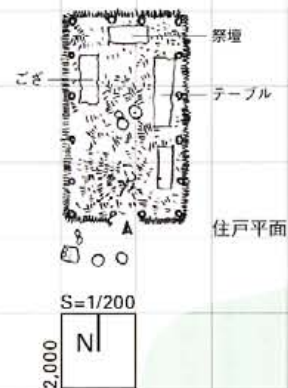


クサル平面(部分)

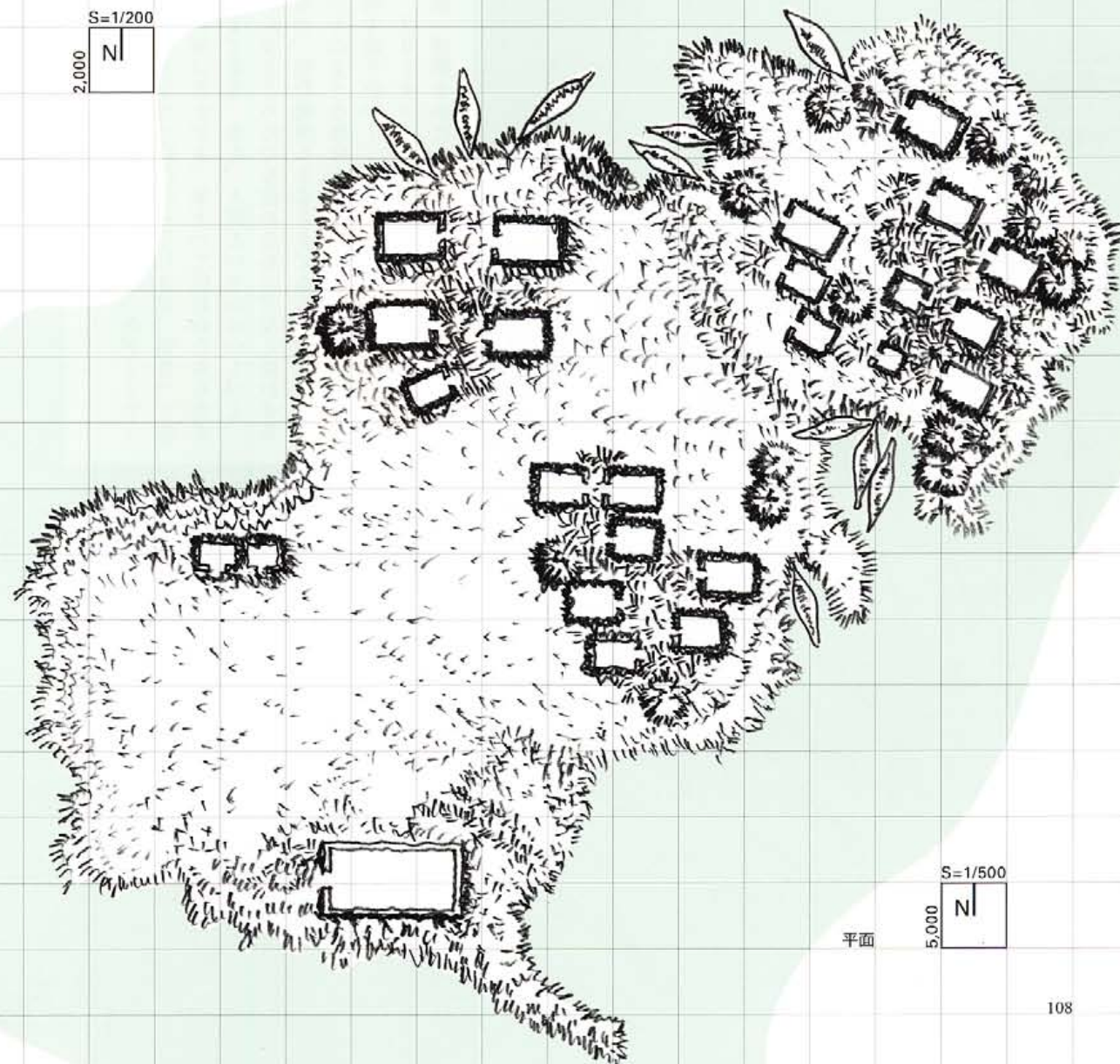
[4-5]

トラニバタの湖上集落／ペルー

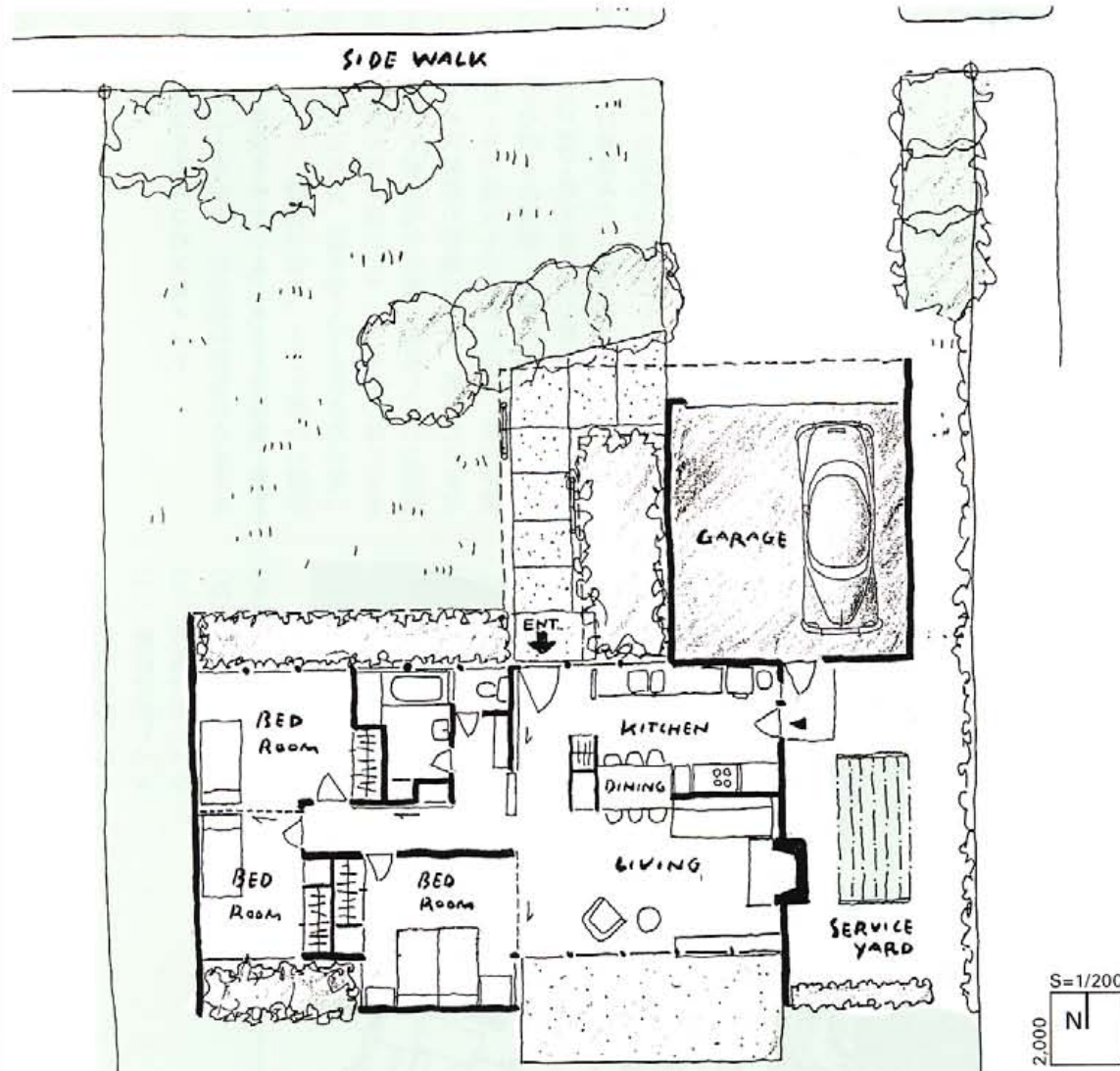
海拔3,885mのチチカカ湖に茂るトトラと呼ばれる水草を幾重にも敷き詰めた浮島である。住居は5~6戸が一群で、約16戸、80人ほどが住む船のような集落。スペイン人の侵略を逃れたインディオたちの隠れ里がルーツといわれている。このような集落はチチカカ湖上に数カ所にわたり散在し、約80戸、1,000人ほどの住民が生活している。



住戸平面



平面



GREGORY AIN'S
MAR VISTA HOUSING
標準型住戸平面図

[4-26]
マー・ヴィスタ・ハウジング/住戸・団地計画: グレゴリー・エイン (共同:
ジョセフ・ジョンソン、アルフレッド・ディ)、外構・植栽計画: ガレット・
エクボ/アメリカ、ロサンゼルス/1948
平面計画は、可動間仕切りの開閉で、居住者の生活スタイルに合わせて変更
できる。また、施工の容易さなどの理由で使用された4フィートモジュール
は、デザインアクセントにもなった。建売りののに街並みが単調にならずに
バラエティに富んでいるのは、標準型住戸平面の回転・反転と車庫の位置で
13通りの平面計画を実現したからである。さらに、プライバシーと街並み
を考慮した住戸配置は、リズムカルで緑豊かな空間をつくり出した。

ロサンゼルス郊外に分譲された五二戸からなる住宅群は、半世紀以上たった現在も分譲当時の面影を残したまま静かにたたずんでいる。住戸面積は九三㎡と小さいが、キッチンをコアとし裏庭側に自由度をもたせた平面計画は大規模な住戸改変を抑制した。全戸同平面計画のため、居住者間で部屋の使用や住宅の問題解決などについての情報交換も行われている。また、前庭の連続した芝生と大きく成長した街路樹は住宅地に豊かな緑地空間をつくり出した。

亀井靖子

